独り言 BPS

Beethoven Piano Sonatas

■プロローグ

それまでは週に 2，3 度の訪問が老骨に程よいリズムを与え、一応、平穏に日々の暮らしを立てていたが、新型コロナウイルスが取り沙汰されて老人施設も面会謝絶、途端に変化対応に鈍い身、時の処し方に戸惑う始末・・・、あれこれ思案の果、Web の youtube で音楽でも聴くか、だった。

きっかけ（イ）
シューベルトのピアノソナタ、19,20,21 を、アファナシェフでまとめて聴いた。
21 は CD もあり何度も馴染んでいたが、あらためて３つを並べて聞いてみて発見したことは、なんと言おうと 21、この一曲があれば、他のピアノソナタは無くても哲学は充分にうかがい知れる、喜び、哀しみ、憧れ、苦渋、高揚、逡巡、etc.
まさしく 31 歳の人生の凝縮、80 歳の自分の何十倍もの高密度、やがてはいずれ命尽きるは一緒だが、後世まで残る価値のあるなしは天地である。音楽、最高！
なお、「終わりそうで終わらないベートーベン」を彷彿、敬愛してやまなかった先立とか、またこれら終末の３曲はシューマンに献呈されているとか、いかにシューベルトの末期の思いが深甚だったかが伺える。
それにしても、一音一音の繋がりの間に、これほどの感情を呼び起こすとは！例えてみれば俳句に通ずるものがある、語る者、聞く者、双方に深く広やかな想像の自由を許し、自ずからなる感銘の余韻を残せしめる、まさに芸術の醍醐味、此れに如くは無し！

きっかけ（ロ）
モーツァルトのＫＶ333 を老ホロヴィッツで聴く、なかなかなり！しょっちゅうハンカチで鼻を拭いつつ・・・、その頼りなさと確かな演奏とのミスマッチ、それがまたほんのり穏やかな印象を醸す！（ピアノに向かって座る時、立つ時、いずれも鍵盤の奥のヘリを両手で握って、よっこらしょっと・・・。）
つぎのアンコールがなんとシューベルトのＤ899！の第一楽章のさわり、ぴったりの！

きっかけ（ハ）
ベートーベンのピアノソナタ 31 と 32 をポリーニで聴く、抜群！言うことなし、この組み合わせ、いいね！
あらためてベートーベン！男臭ささむんむん、猛々しさ、男の優しさ、苦悩と憧れ、凛と

した気高さ、etc.　堪らんなあ！初め、31の完璧さに、もう後は聴くのをやめにしようと思った、だが32に及んで、とくにその第２楽章！なんと言う芸術であろう！最後のピアノソナタということだが、至高の極みだ！
退職してから集中してクラシックを聴くようになり、バッハ、モーツァルト、そしてベートーベン、シューベルトと続き、ショパンで一段落・・・、お決まりの遍歴だったが、今日、こうしてベートーベン、それも何度目かの31、32なんだが、この感動はまた新しい発見だったなあ！人はその脳の特性から、解釈とか記憶は常に動き変容するという、まさにその感を深めたよ、80にして「マサ二、サイゴ、ノ、カンドウ」かもなあ・・・。
尚、32の2の、何処までも上り詰める楽章を聴いているさなかに浮かんだのは、かの明恵が夢で兜率天まで辿り着いた時の光景だった！ベートーベンの心中、また、かくの如しではなかったか・・・。

■一聴入魂

そんなこんなで、ここは一つ、何かまとまった聴き方をと思い至ったのがベートーベンのピアノソナタだった。実はここ数か月はもっぱらバッハのピアノソナタをあれこれ摘まみ食い、それも各曲のサラバンドを心のくつろぎにしていた、が、少々食傷気味になりペースも緩慢になっていた、とそこへコロナと youtube、そしてベートーベンのピアノソナタ31、32番との再会・・・、そんなわけでBPS（ベートーベンのピアノソナタの、以後、我が勝手なネーミング！）シリーズとなった。全BPS32曲、これならコロナが済むまでなんとかこなせるかも、限（きり）が見えてて気も楽だ・・・！
ここで思ったのは、世にごまんとある解説書や評価・感想文の類を無視し、ド素人のこの耳で虚心坦懐に、自由に愉しんで聴いてみよう、ということだった。音楽理論、演奏・解釈論、鑑賞論、etc.は、気になるなら後で覗いて見ればよいと決めた。かくて自由にのんびり我が道を行くことにした。
なおお世話になったのはたまたま youtube で、バレンボイムでベートーベンのピアノソナタ全集が纏めてアップされていたものだった、一部欠番があったがそれは他のピアニストのもので補った、アーチストに拘るようなガラではないし！

＊一昨日からバレンボイムでベートーベンのピアノソナタ全集をまとめて聴き始めた。1から10まで来た。やけに早かったなあ、というか、軽やかで若々しい調べの数々、時々、モーツァルト？と思い違いをしたり、兎も角、老いた耳に、来し方行く末、様々な印象を呼び覚まし、まるでベートーベンの青春が乗り移ったかと、自分でもびっくりの連続だった。

BPS1(Op2-1)、改めて聴き直す。何故か高校生活晩年、大学受験直前の頃の心象風景が浮

かぶ、抱負、不安、勇気、そして決意の第一楽章、一方で恋に恋する少年の夢うつつの第二楽章、そのメランコリーを親友に打ち明けて、多少の慰めに酔う第三楽章、そして第四楽章、ひたすら受験勉強に没頭の雄叫びと実行、後半、いよいよ故郷への別れを告げ、いざ、京の都への旅立ち・・・、夢破れて浪人になる運命とはつゆ知らず・・・。

BPS2(Op2-2)、一聴、少年期の様々な感情の沸騰に、胸掻き乱される！特に中学１年の春、胸の病（肋膜炎）に倒れ自宅病臥で留年の憂目・・・、単に一年の遅れというにとどまらず、そのことがもたらす少年にとっては"尋常ならざる"状況への対応の度に、悲しみ、悔しみ、はかなみ、怒り、諦観、孤独、矜持、奮起、憧れ、etc.、謂わば“感情の総カタログ"が、懐胎されたように思われる。ベートーベンのこの一曲は、まさにそんな少年の日々を呼び覚ました！

BPS3(Op2-3)、なんでもない日があるものである、勉強であれ遊びであれ、忙しかろうがゆっくりであろうが、ごく普通に流れてゆく時間・・・、そんな中でもふと立ち止まって思う時がある、「一体、自分は、何を考えて暮らしているのだろうか・・・？」と、つかの間ですぐ立ち消えてはしまうのだが・・・。
この曲は、第一楽章と第三、第四の 3 つが日常の、取り立てて言うほどのこともなく流れてゆく風景であり、第二楽章が“立ち止まり”だった、降りしきる粉糠雨の中、答えもない思いがしとしとと煙り入る・・・、ま、故郷の田舎町にもそんな日があったなあ・・・。

BPS4(Op7)、全体、青春の哲学瞑想と詩情心情の風景！！第二楽章は例によってあの"一音一音"、発しては耳を澄まし、宙に何かを聴くように、あるいはまた発しては何かに応えんとしているかのように、largo の階調に身を委ねつつ、音の対話またモノローグが、あたかも額に皺寄せた若者の渋面ぶり、ベートーベンと自分が重なりあってしまうほどに。一転、第三楽章の軽やけく明澄な詩人の魂、途中若干の自制と憂愁が心よぎるものの、憧れに弾むギャロップは止めようもなく前進する！第四楽章はこれまでの第一から第三までの主要なモチーフが、周り燈篭の様に巡っては消えて行く、ベンちゃんにしては珍しい締めかた・・・。

BPS5(Op10-1)、「小悲愴」とか、誰がどう聴いて？とんだ見当違いじゃん！ま、それはさておき聴いてみた。
第一楽章の出だし、鳴った途端、パッと浮かんだのが、京の寺での浪人時代！6 時起床から夕餉終了 7 時まで、寺男の指図で作務三昧、庭園管理、作物管理、一般掃除から肥し汲みまで黙々とこなす、合間に参観者が在れば院内ガイドも一くさり、門主の使いで叡山や近隣の寺院へも代理で参上等々、信じ難い程の八面六臂ぶり、疲れも知らず、まさにこの楽章でベートーベンが後押しでもしている如きリズムに乗って！・・・そして自由の夜、受

験科目の予習に埋没、4 当５落さながら、いつしか夜明けの杜鵑に起こされるまで・・・、めげずに第一楽章が終わる。
第二楽章、なんと優しき調べであろうか！清々しい光と美風が降り注ぐ、慈愛に満ちた観音の衣摺れを枕に、思わず感涙の滲みを禁じ得ない・・・、現に己が泣き声に目覚めることが、幾夜かはあった気がする・・・。
第三楽章（終楽章）、再び作務に走りまわる一日が始まる、予備校にも通えぬハンディーの不安をねじ伏せて、置かれた今と精一杯の格闘、行くんだ、光をもとめて！誰も助けてはくれない、頼りはこの歯の喰いしばり、でも眼前は何故か常に明るく心に一点の翳りも無かった、いざ！
＊ベートーベンの意図を、250 年後の異国のガイジンが、狭隘で私的な独白のバックグラウンドに無駄遣いするなんて！・・・、でも、ぴったしなんで！御免。なお俗称の「小悲愴」だが、ちょっと大袈裟だなあ、青少年特有の構え、衒いというべきか、隠せない明るさをも秘めている、しかも悲愴など、当時の少年にそんな客観的自己観察などありようも無く、ただひたすら渦中の人、青春の一コマだったんだよなあ・・・。

＊ベートーベンのピアノ三重奏(BPT)、全 7 曲を聴く、第 7 番「大公」は何度となく耳にして馴染みがあった他は初めて、ただ印象に残ったのは第 2 番の第二楽章のみ、そのメランコリックな曲想、 BPS でも馴染みのある調べだったことぐらい。
押し並べて、 BPS から得られた感興はついぞ無く、vn や vc はむしろ p の邪魔！、ただ、ピアノの高音部でもうキーが無いのを補いたかったのか知らんが、あるいはピアノの一音一音の効果を代弁・強調したかったのか、vn や vc の援用で三重奏とはなったのかも・・・、いずれにせよ BPS の純粋性には比べようもない、聴く者に孤独で真摯な対峙を求め、かつ聴く者の自由で創造的な物語を想起せしめる力は、 BPS を置いて他は無い！
と思ったなあ、これは好みの問題かなあ、実は最近富に耳が遠くなっている、(ベートーベンに似て!)特にピアノの高音部に弱い、聴き取れない、聴き分けられない、交響曲など分からない、テレビも聞こえなくなった・・・、こんな身には単一楽器による音楽があつらえなのかも。

BPS6(Op10-2)、3 楽章、13 分と短かな曲、だが、大学入学当時の浮き立ち舞い上がった青年を一瞬に描写したかにも思えた！
第一楽章は、授業や友人は当然、生活も環境も何もかも新しく自由な世界の中心に居る自己、しかも憧れの京の都のど真ん中だ！学校、山岳部、アルバイト、コンパ、ゴウハイ、安保デモ、etc.24 時間春夏秋冬、寝る間も知らぬ神出鬼没・・・ジャジャーン！
そんな中にも、ふと我に帰ったかのように、内心目指していたものが疼き出す夜がある、第二楽章はそんな青年の純粋な詩情を呼び覚ます、或いは哲学の憂いの紫煙に包み込む・・・故郷を後にした初心や何処・・・。

第三楽章、掌を返した様に、性懲りも無く、浮かれ学生さんの多忙な日が続く、知も情も渾々たる泉の如し、溢れかえるを留めるものの焉んぞ有らんや？！

BPS7（Op10-3）は８「悲愴」の直前に位置し、何か　その予兆を感じてしまう、ただ才気煥発に任せて階調やテンポの入れ子・急変が目まぐるしく、噛み締めて味わってる暇がない！とは言え、新鮮な果実を噛り食んだ時のような、眼前に爽やかな風景が垣間見えた！

BPS８（Op13）「悲愴」、３楽章、20分。
第一楽章、何か迫り来るものあり、地鳴りか怒涛か、暴君か援軍か、だが不安と焦燥の内にも、心底に潜む熱き魂は、いよよ反骨の拳を振り上げんと昂ぶるばかり、なんの逃げてたまるか、受けて立とう、これ以外我が存在の道はない！これが青春の門出というもの、いざ！
第二楽章、甘く懐かしく多少切なく、己が決意を宥めすかす如く、（もし側に居たとして）愛する人も微笑んでくれたであろう優しい言葉のように、メロディは青年を風にくるんで運び去らんとする。
第三楽章、明るく弾むように若々しく、怖れも不安もなく、選んだ道を行くばかり、矜恃の旗をひるがえしつつ！
一聴、この曲の何処が「悲愴」なんだろうか？彼自ら命名したという珍しい作品ということだが・・・、恐らく察するに、青年特有の「ウブな深刻ぶり」ではなかろうか、なんとも若々しく微笑ましい「悲愴」感！・・・なんとも懐かしや！（1年の留年後、なんとか卒業はしたものの、向日町の鉄工所で錆まみれの日々、次なる進路にあれこれ混迷の激流に揉まれていたなあ・・・、結局は凩の頃、当てもなく東京への夜汽車の人となった・・・。

BPS9(Op14-1)、３楽章、15分。時の歯車が非情に淡々と労働者を押し流して行く、世は高度成長のしょっぱな、誰も何の疑いも挟まず黙々と仕事に邁進している、むしろ嬉々として収入と生活に励み続ける・・・、そんな東京のど真ん中へ、食うに窮した晩生（おくて）の学卒一人、京の田舎から現れる、会社とか企業とか経済とかが何なのか知らず、ましてや当時先端新規と目されていたマーケティング専門の零細企業に職を得る、所詮労働者である、初手である、七転び八起きの日常に組み込まれて行く・・・、第一楽章はそんな有無を言わせぬ状況の活写だ！
疲れ果てて眠る、夜半の目覚め、「俺は何をしているのだろう・・・」、問い詰める力も無くまた、眠りに落ちて・・・、別れた人の俤が一瞬よぎったりして・・・、第二楽章。
再び日が昇り、満員電車に運ばれて、大都会の歯車が轟音と共に回り始める、第三楽章（終章)、そしてこれが実は現実に飲み込まれて只の人へと、夢現の青春が消えてゆく入口だったとは、知る由もなし・・・。
＊取り分けて特徴的な曲ではないが、手前勝手な印象にはぴったし！これを聴かなかった

ら思い出しもしなかった出来事に、今、ありありと出くわした、音楽の不思議！

BPS10（Op14-2)、なんとこの 10 がまた素晴らしい！
或る晴れた春の日、恋人が待つ両親の家へ行こうと、喜びと緊張とのないまぜのるんるん気分で・・・これが第一楽章。初めて会うご両親や兄弟姉妹との対面、柱の向こうにちらちらとお茶目にこちらを伺う恋人・・・これが第二楽章。その後、恋人と二人、近くの海岸へ繰り出し、追いつ追われつ裸足で渚を駆け回る、光る春の海、限りなく明るく・・・これが終章の第三楽章。
ん？これって・・・、過っての自分！！
恐らく、この頃、ベートーベンは、あの顰めっ面の陰に、何やら浮き立つ恋心を懐胎していたのかも知れない、「お主、やるな！」・・・。尚、前の 8「悲愴」の伏線があってのことと思うと、この 10 が一層得心が行く？！勝手なもんだが・・・。

BPS11（Op22）を朝一で聴く、昨日 10 を聴いた後のせいか、気分は続いているようだが、待てよ、恋だけが男じゃないぜ、という感じ、つまり悩むべき人生や哲学が待ってるぜよ、の声がする・・・、そんな一曲だった！だが未だ若い、恋に弾む心に身を任せて、再び陽光の下へと駆け出して行く、ああ汝、愚かなる詩人よ！

BPS 12（Op26)、「葬送」。4 楽章、20 分。第一楽章、ゆっくり静々と進む調子は、まさに曲名のイメージを思わせる、が、なんとなくよそよそしく、「謹んでお悔やみ申し上げます」という風情、とても近しい人、愛する人への“慟哭”の感じでは無い。ちょっと参列を外して、遠目にタバコを一服、小鳥も風も爽やかな日和・・・、それが第二楽章。第三楽章はまた荘重な低音で、悲しみの蘇りを誘う調べ・・・、だが何時しかほのかに光が差し込んでくる、何かしら希望の膨らみを気づかせるような明るさが！そして第四楽章、更に輝きを増した光が、キラキラと、多重に溢れこぼれる、悲しみの彼方にはきっと素晴らしい恩寵が待ち受けている、逝った者へも残された者にも新たな命の朝が！・・・。
蛇足だが、この第三楽章は、かっての流行歌「〝雪の降る街を～」を連想させたなあ、ショパンの幻想曲（Op49）の一部援用と囁かれたりもしたが、それは歌の出だしには言えたが、歌の後半、次第に明るく希望が湧いてくる部分は、このベートーベンの後半の曲調がピッタリの実感を持ったなあ、誰もが一所懸命にやっていたことが、どこかで偶然すれ違ったりする、そんな不思議を感じた・・・。

＊何故、たったの一音と一音との聴取によって、人は心を揺さぶられるのだろうか・・・、特にベートーベンのピアノソナタを聴いていて、必ず第何楽章かに現れることが多いのだが・・・、
実はその謎を解く手懸りを、今日、サックス「意識の川をゆく」の文中に発見した！そこ

では視知覚がもたらす意識に関することだったが、一瞬一瞬のスナップショットが、何故か動きを感じさせ、人に判断を促し、感情や行動を起こさせるのだろか？それはつまり、唯今のスナップショット（知覚）が直前のスナップショット（記憶）を想起し、その間に何らかの関連を探るという人間の脳というものの特性がなせる業故なんだとか、つまり”意識”を働かせるからだと言うのだ、何兆何億というシナプスの森に連合されている、人それぞれの記憶と連想、それが人のアイデンティティであり、それぞれに呼び覚まされる感情や物語となって表出されるとか・・・。
ひょっとしてベートーベンは、ここいらの原理を、聴覚に関して巧まずして心得ていたのかも、一音をじっくり聴かせておいて、十分な間をおいてまた最適な一音を聴かせる、この“ま”が聴くもの各々に自由で個別の感興を誕生させるのだ、そうか、彼は耳を患っていたというが、そのじっと耳を傾ける必然性が図らずももたらしたスゴ技！尚更なあ。

＊朝、音楽の泉で K299　モーツァルト、バレー音楽、その中の「パントマイム」、心浮き立つ調・・・マルソーの身振り手振りが目に浮かぶ。

BPS14（Op27-2）、「幻想曲風」俗に「月光」とか、確かに第一楽章はそれそのもの、少年の頃から脳裏に刷り込まれており、なかなか他の印象のつけ入る余地は無い、〝月影や昨日も今日もベートーベン　なーんちゃって、冗談はさておき、第二、第三楽章とも、どうしても第一とは馴染まないのである、第一だけでよかったのでは！？或いは、・・・。

BPS15（Op28）、「田園」とのサブタイトル、聴き終えてまさにそのもの、第一楽章ののどやかな雰囲気、第二楽章のメランコリックな散策、小鳥や小動物に会い、草原を渡る風に誘われ、“・・・あの人は行ってしまった・・・”、自ら踏ん切りをつけ帰途へ。第三楽章は天候急変、一つ二つ遠雷も。第四楽章は晴れやかに、第一楽章の気分に回復して・・・。思ったね、我が「ハゲ山の一日」！

BPS16（Op31-1）と 17（Op31-2）を聴く、何か関連が？
先ず 16、一聴、夜想曲風、或いは夢路を辿る風、特に第二楽章も似た曲調。
次、BPS 17「テンペスト」。お馴染み。出だしからしてドラマチック！何やら焦燥感と逡巡、あの"一音一音"が・・・、そして第二楽章、諦観と静謐、またしてもあの“一音一音"、後は快調に目覚めて第三楽章（終章）へ！まさに心に響く曲である。
なおこの第二楽章は聴く度に、高次脳機能障害の妻を見舞って、二人言葉少なに対面している時の情景を、デリケートにかつ生き生きと活写されている思いにさせられる・・・流れる雲、囀る小鳥、彼方へ去り行くジェット機など、今現成するものは話題に出来ても、過去の思い出や出来事など、共にした華やかで豊かな人生を話題にすることは出来ない、（しようにもほぼ全記憶が喪失してしまっている！）、その寂しさや悲しみ、敢えて触れな

いようにとの気遣い・・・、この彼我の間を流れる時間が描写されているのだ。まさに全楽章相まって、我らが如き状況に置かれた者たちへの鎮魂の調べと言っても過言ではない。

＊北イタリア、パルマ地方の猛禽類の生態を記録した TV を見た、一つの発見、「チョウゲンボウは目で狩りをし、フクロウは音で狩る」ということ！これ、近頃、問題にしていた知覚、意識、行動に於ける、多様性・個性・アイデンティティ問題を彷彿させられた。同時に自然を見るというのはこういうこと、つまり“見るから聴くへ”なのであろうと得心した。そう言えばリルケも晩年、“見る人から聞く人”へ！ベートーベンを聴くのも、玲子を聴くのも、すべからく“己を聴く”に通じていたのだ！いやはや何をか言わんやだなあ。

今日は BPS18（Op 31-3)、つまり昨日の 16 と 17 に関連していたのかな、確かに 17「テンペスト」の流れを汲む様相だった。第一楽章、第二楽章とも、テンペスト明けと言わんばかり、何やら未だ振り切れないものを引きずっている・・・、だがそれも第三楽章に至って、落ち着いて考え直してみる、空を見上げ、流れ行く雲を追う、そうしている間に気持ちに穏やかさが漲ってくる、まさに"Menuetto Moderato e Grazioso" ！　で、第四楽章、「よっしゃ､それ行け！」で一気に弾む心､「何も恐れることはない」､"Presto con fulcrum"！やはり 16 と 17,18 はセットとして見ると一層、ドラマとしての完成度が増すなぁ。（こんな我流な鑑賞態度、続けていいのかなあ、ま、しばらくは走ってみるか・・・)。

＊それにしても、ベートーベンは一体、何を表現しようとしたのだろう、いわゆる「テーマ」は？と、月並な疑問が、どの曲でも聴くたびに頭をかすめる、苦悶、憧れ、喜び、感動、不安、高揚、etc.そうした心の動き（結果）をもたらしめたもの（原因)、つまり彼の作曲活動を推進せしめてやまなかった奥底の動機が、どうしても何だったのかを探りたい気になってしまうのだ・・・、自分の俳句自体、そうした問いに常に晒されていることを鑑みるにつけて、なかなか即、答えが出るものでもなかろうが・・・、ただ言えることは、「テーマ」の大小、重軽、深浅、高低、美醜 etc.に応じて、作品の芸術性の真価が問われることは確かだろう、「ベンちゃん」はまがいもなく真の芸術家だった！！

＊ここで BPS（ベートーベン・ピアノ・ソナタ）全 32 曲のリストを整理しておこう。
BPS 番号=Op 番号、「愛称」
1=2-1, **2**=2-2, **3**=2-3, **4**=7, **5**=10-1「小悲愴」, **6**=10-2, **7**=10-3, **8**=13「悲愴」,
9=14-1, **10**=14-2, **11**=22, **12**=26「葬送」, **13**=27-1「幻想曲風」, **14**=27-2「月光」,
15=28「田園」, **16**=31-1, **17**=31-2「テンペスト」, **18**=31-3「狩」, **19**=49-1, **20**=49-2,
21=53「ヴァルトシュタイン」, **22**=54, **23**=57「熱情」, **24**=78, **25**=79, **26**=81a 「告別」,
27=90, **28**=101, **29**=106「ハンマークラヴィーア」, **30**=109, **31**=110, **32**=111 以上

BPS19（Op49-1）、2楽章、8分。第一楽章、出だした途端、夢に往年の初恋人の面影を追う風景、甘く切ない胸を抱えながら、あの丘この街を訪ね行く・・・。第二楽章、夢醒めて、慌ただしい日常の雑踏へ紛れ行く自分、感傷に浸る余地も無く・・・。この19は未完なのか？

BPS20（Op49-2）もまた2楽章のみ！8分。急・緩・急の構成、仕事は順調、家族にも恵まれて明るく穏やかな日々ではある、時たまこれでいいのかと溜息の出ることも無いではないが、流れに任せてまた日常へ戻って行く･･･、切ない夢もまた忘却の彼方へ消えて･･･。先の19ともども、これも未完かも、合わせてやっと1曲か？

BPS21(Op53)「ヴァルトシュタイン」、のっけから「ダダダダダダダ・・・」と機関銃をぶっ放すさま、何事ぞの驚愕を尻目に、かなりの間、その勢いは止みそうにない、ふと止んだかと思いきやまた「ダダダダダダダ」が！何時しか止んで、第二楽章の一音一音の重苦しい忍従の連打が続く・・・、やがて微かに遠くに、長いトンネルの出口の輝きが、次第に増す音量とともに迫ってくる、もう既に第三楽章に入っていて、歓喜とも開放とも言える大いなる結末に雪崩れ込む！
中期と言われるこの頃、彼の聴力の衰えはかなり進行していたとか、そんな矢先贈呈された新しいピアノ、1オクターブ増したものに挑戦の気概で臨んだのが、この21だったらしい、だが想像するに、彼ベートーベンは既に「聴覚ではなく視覚」で楽譜を書いていたのではなかろうか、彼の脳内で自在に展開し「聴こえる」音を、ただ五線に書けばよかったのかも・・・、あり得なくは無いかも。

BPS22(Op54)、2楽章のみ、12分。
気のせいか21「ヴァルトシュタイン」の終章を引きずる余韻の如く、夢現の気分が続く第一楽章、続く第二楽章も謂わば「・・・蝶が出で舞う」春の宵さながら、たおやかな風のなかを彷徨う風情、なんの心悩むことやあろうか・・・。
（実はこの後、23の「熱情」が待ち受けているとは、本人も誰も、知る由もない！）

BPS23(Op57)「熱情」3楽章、23分。
第一楽章11分。予兆、胸騒ぎ、憧れ、不安、激流は大海に飲まれ、平易されたかと見るや、押し寄せる大波に翻弄され、怒涛となり、逆巻き崩れ落ちる、これでもかこれでもかとその繰り返し・・・、そのさなかにも細くも強靭な琴線のように、高音で切ない憧れが鳴り響いて止まない、この怒涛と琴線の対比は、一瞬、北斎の「神奈川沖図」を彷彿とさせられた！
第二楽章、独り静かに自制、抑えて鑑みるに、人との出会い、叶わぬ願い、如何ともし難き定め、誰しも時には諦観の涙が滲むのを禁じ得ない、若く純粋な青春であればあるほど

に・・・。Andante con moto 静に
第三楽章、急変！再びあの怒涛の高鳴りが襲う、ふと中断かと思いきや、また押し寄せるして！留まるな、行け、渾身の雄叫びを胸中にねじ伏せて、むんずの唇と耀ける眼光を以て、汝が想いの高みへ！じゃじゃーん！！

BPS24(Op78)「テレーゼ」、２楽章 10 分余。輝かしい夏の高原、風、雲、草いきれ、愛する人との暫しの散策、このひとときがやがて消え行くであろうことへの、愛おしさと予感とのないまぜの胸騒ぎ、定めと己に言い聞かせながらも、なお、その人の嫋やかな微笑む横顔に、失うことの苦しさが・・・、ああ、夢よ、夢よ、・・・。

BPS25(Op79)、3 楽章 10 分と短い。第一楽章、何か真意を隠すように、おどけて走り回るマイムのピエロ、心は神経質なアルルカン、どうしたというのだ。第二楽章、言えなかった心の内が、溜息混じりに・・・、去りし人の俤が偲ばれて、悔恨に似た感情が滲む・・・。一転、第三楽章、少し大人になって、さあ、明るいピエロに戻ろう、人生ってそんなもんさ！

BPS26(Op81a)「告別」3 楽章、18 分。
第一楽章、"Das Lebewohl"とある、ずばり「告別」！友？恩師？愛する人？更にまた死別？生き別れ？・・・、迷うところだが、曲の数音の出だしは、どう聴いても葬送の鐘だなあ、とすれば、後は誰かだな、この後多少解せぬところもあるが、一応「愛する人」と置いて聴いてみよう。在りし日の俤の数々、命輝く日々、駆け巡り、それ故にこそこの胸の痛みはいやます、ああ、愛しき人よ、なぜ一人行ってしまったのか・・・、ふと目を上げれば、若葉が風に揺られ、陽の光と戯れている、明るく、穏やかに。
第二楽章、"Abwesenheit"とある、「不在」「放心」。悲しみに耐えんにも、何につけその人の俤が巡る、笑顔だがどこか寂しげな陰が漂う、優しく愛しき人よ、その心根を何ほども感じ取れていなかった己れが悔やまれて・・・。
第三楽章、"Das Wiedersehen"、「再会」。葬送・悔恨という前提だと、この楽章の元気溢れんばかりの調べには戸惑うが、やがての「天上での」再会、その願いと現成のイメージ描写と執れば、ふさわしい終章となろう、まさに曲想の指示は"Vivacissimamente"、なんだか分からないが多分「活き活きと」かな！

＊なんと BPS26「告別」は、ベートーベンのパトロンのルドルフ大公へ献呈されたものだった！フランスとの戦で一時国を離れ、敗戦後戻った公との再会を歓び祝す"Vivacissimamente"だったんだ！
なぁーんだ、先程の我が解釈の見当外れ、しゃあないなあ、何処かちぐはぐだとは感じていたが・・・、ま、何の知識や準備も無く、生で取り組んだ心意気を褒めてやろうかい！

実は「告別」に弔いの意味合いはもともと無い、ただ「別れの挨拶」というに過ぎなかったのを、思い違いしたのが、そもそも誤解の始まり！なぁーんだ！

BPS27(Op90)、2 楽章、14 分。２つとも、ドイツ語の長い指示が付いていたので、先ずはそれらから。
第一楽章、"Mit Lebhaftigkeit und durchaus mit Enfindung und Ausdruck" 活き活きと、だがあくまでも感情と表情を込めて、とか。
第二楽章、"Nicht zu geschwind und sehr singbar vorgetragen" 余り速すぎず、あたかも歌うように、音を長く維持する心で、とか。
確かに第一楽章は、快活かつ威厳に満ちて始まるが、途中、幾らか心許ない優しさも滲むフレーズも散見、鬼の隠し涙・・・。そして第二楽章、あたかも来し方の諸々に、優しくもやるせなく思いを致す風情、いろいろあったなあ、今日まで来てしまったなあ、どういう行く末になろうとも、あずかり知らぬこと、春の入陽が穏やかに海に安らいに行く、それでいいのだ・・・。

BPS28(Op101)、4 楽章、21 分。これもまた各楽章ともベートーベン書き込みの注意書が、記号に先立って一言ずつ。
第一楽章、"Etwas lebhaft und mit der innigsten Empfindung"、気持ち活き活きと、かつ親密な感情を込めて、と。
第二楽章、"Lebhaft marshmäßig"、活き活きと、行進曲風に、と。
第三楽章、"Langsam und sehnsuchts-voll"、ゆるやかに、かつ憧れに満ち溢れる如くに、と。
第四楽章、"Geschwind,doch nicht zu sehr und mit Entschlossenheit"、速く、だが余りにも速すぎず、しかし断固とした決意を込めて、と。
これでは曲を聴くまでもなく、既に文章で予告してしまっているようなものだなあ、聴く者の印象の先回り！ともかく、聴いてみた。
第一楽章、出だしからして何か「憧れ」に満ちたほのぼのとした数音が流れて、穏やかに過ぎし日を思い、希望に輝く未来を夢みるような、おしなべて和やかな階調が流れて行く。第二楽章は文字通り元気に闊歩するように、諸々乗り越えても来たし、前進もして行こう、なんの迷うことの在らんや！第三楽章、そうは言いながらも、と言わんばかりに、達成出来なかった場合への一抹の不安、弱気、だがこの胸の燃えたつ憧れの炎（ここで第一楽章の出だしの同じ数音が一瞬、切なげに流れ過ぎる！）を誰が止め得ようか・・・。第四楽章、いざ、目指すところをしっかりと見つめ、立ちはだかる障害を乗り越え、断固我が道を行こう、君は待たれているのだ！

＊今年はベートーベン生誕 250 年とか、12 月生まれで 3 月に亡くなった・・・。それはと

もかく、こうして BPS を聴いて来てそれらを味わい解釈するに当たって、作品の原動力、煎じ詰めれば思想・哲学・人間・資質を垣間見たくなるは、必定であろう、で、とうとう先程、Wikipedia へ行ってきた。
キーワードは「反骨」だった！出自・生育環境・社会的地位・経済的境遇の中で、自己の存在を確立しなければならなかった時、少年・青年は如何な戦略・戦術の選択を迫られるであろうか！答は自ずと明らかだ、反骨！単に生きる為にも、芸術を極める為にも、恋をするにも憧れるにも、権威や暴力に立ち向かうにも、月並や退廃を排する為にも、etc. 反骨！それは聴覚障害を始めとする様々な疾病という自己自身への闘いにも止むことはなかった・・・。
（戦争で父をなくし、母の苦労で生育・教育され、なんとか社会に出られた身につけても、戦争という不条理、それが結果・拡散させる膨大な不条理の連鎖、そういう状況下での人生は、煎じ詰めれば「反骨」が支えにならざるを得なかろう）
ベートーベンの音楽の印象を、人それぞれの言葉で述べる時、いろいろな単語が用いられるだろうが、中でも激情、苦悩、奔放、憧れ、慈愛、等々は欠かせないが、それらの底流にあるのは他ならぬ反骨だったのだ！一部の文人や哲学者が祭り上げる「偉人・超人」や「天才・天使」などでは決してない！と思う。

BPS 29(Op106)「ハンマークラヴィーア」、4 楽章、48 分。他の多くの作品の倍近い長さだ、特に第三が 20 分、第一・第四が各 12 分、第二は 4 分。なおピアニストはバレンボイムのが欠番だったので、エミール・ギレリスとかで聴く、演奏者によってかかる時間の大幅にに違う、解釈の難しい曲なんだとか。
全体的に大変に独特な印象の曲である、ここまでのどの作品とも違い、浪漫派の香りは消えて、或いはその昇華が故に到達したと言うべきか、極めてハイテンションでありながら何とも静謐の気に満ち溢れている、不思議の調べ・・・。
第一楽章、来たるべきものを告知・予告せんとする如き連打に始まる、集え、聴け、と言わんばかりに。第二楽章、無くもがな、第一楽章のだめ押しとも。そして第三楽章、いよいよ「来たるべきもの」の登場、現れである、だがそれは人でもなく物でもなく、神や天使でもなく、太陽や星辰でもない、とにかく視覚には感知されないが何かがあることは疑い得ないもの、まさに聴覚を以てのみ感受され得るものが、静やかに晴れやかに穏やかに、聴く者の心を包み込んで止まないのだ、強いて喩えれば華厳の世界、人はそこに安らう・・・。
さて第四楽章、ひと言でこれはバッハのフーガの世界！先の楽章を受けて、交信をかわす SETI（地球外知的生命探査）さながら、来たるべきものへの様々な波長の発信の畳み掛け、真の解放への憧れが頂点を目指す！
後の BPS32、最終曲の、これは伏線となった曲ではなかったか、通底するものを感じざるを得ない。

BPS30(Op109)、3 楽章、22 分。昨日の 29「ハンマークラヴィーア」の感興が高過ぎたせいか、その余韻の陰に、これは隠れてしまいそう、第一、第二の前置き後の第三楽章が 15 分と中心となるのだろうが、全体のどやかに歌うような、時に華麗な雷鳴のアクセントを交えつつ、まさに 29 で辿り着いた境地を縦横無尽に味わい尽くさんと駆け巡っているような・・・、いずれにしろ途上のひとときなのであろうか、「何処への」途上かって？・・・。

BPS31(Op110)、3 楽章、22 分。何度聴いても感動もの、この 1 曲に彼ベートーベンの魂の遍歴と総括が込められている、人はその全エネルギーを追体験させられる、悲しみ、喜び、憧れ、諦念、勇気、etc.決して神仏ではない、人間ありのままの尊厳と昇華の啓示をこそ、人は感受する！
第一楽章、見上げる夜空、来し方諸々、憧れも悔恨も、今では清澄な思い出となり、キラキラ大小の星屑とまばたいている、これでよかったのだろうか、それでいいのだ、あの星この星、どれも無我夢中精一杯の物語だったのさ、これでいいのだ・・・。
第二楽章、「〽タンタンタララ、タンタンタララ・・・」、一転、キレの良い好テンポで、自在に駆け巡る魂、前の楽章のこころを自ずと肯定し納得させ元気付ける！さあ、行こう！
第三楽章、ところが、この悲しみの極みのような出だしは？鎮魂歌・・・、この期に及んで、なぜ、なんなんだろう、と不安に襲われそう、だが、静かに晴れ上がる靄、清々しい青空が見えて来る、蝶が誘っているような、光のさざめきが、バッハのフーガとなって聴こえてくる、天使の来迎でもあろうか？否、そんな、あり得ない、再び気が滅入って・・・、と一転、強打・低音の驚愕、これを機にバッハのフーガ風上昇リズムの再現、これでもかこれでもかの高揚、魂の雄叫び、あるいは讃歌、止まるところを知らず、遂にフィナーレの花火の大爆発！（終了暫し身動き為らず！）

最後のピアノソナタ、BPS32(op111)、２楽章、30 分の大作！先立つ 31 が完成度の高い最終曲とすれば、32 は余禄・おまけ、だが飛び切りの、音楽史上二つとない贈り物となった！しかも 31 と合わせ聴いた者にしか理解し得ない、大パノラマの醍醐味を開示されたと云えよう。尚、2 楽章といいながらも、どこで変わったかを見失う、あたかも 1 楽章の如し。
始め、低音で押し寄せる地鳴りが、何かを探し求めるように迫り来る、次第に姿を現すもの、それは人間の不屈かつ高貴な意志だ、苦患・艱難を越え行かんとする輝かしい意志だ、確と眦を決して、進めよ進め・・・。
一陣の風がよぎる、高揚した胸に安らぎを勧めんか、宥めんか、ひとときのクールダウンがやってくる・・・。
何故かまた、逡巡かためらいか疑いか、一抹の悲しい調べに覆われそうになる、いけない、もっと遠くをもっと彼方に顔を挙げよう、そう、己が意志を信ぜよ、見よ、声を上げよ、サインを発せよ、そら宙に舞うキラキラ光の乱舞が汝を包もうとしている、行け、掴め・・・了。・・・あたかも華厳曼陀羅の世界！

■エピローグ

そろそろ晩春、否、もう周りは初夏の香りと光に満ち始めている、だがコロナは未だ沈みそうにない！

BPS を聴き終えてつくづく思う、音楽は影も形もない、感動を表すことも人に伝えることも出来ない、聴いた本人でさえ瞬間の印象をメモでもしておかなかったら、あのあれその・・・で終わってしまう！他の多くの“見える”芸術と違い、孤独な対峙を強いられる、だがそれ故にこそ、個々に自由で活き活きとした魂の鼓動や輝きを恩寵するのかも、音楽はまさに生あるものに不可欠の糧、しかも湧き出る真水のように清澄なそれなのだ。

ところで、このように伝達不可能な音楽鑑賞って、一体どういう風に考えたらいいのだろう、BPS を聴きつつ常に気になっていた、で、幾つか Web を覗いてたら、こんなのがあった、音楽美学者でピアニストのジゼル・ブルレ（Giséle Brelet）という人が、こんなことを言っている・・・、

「聴衆は自己の外側におかれているものを手に入れるようにして音を理解するのではなく、自己の内側において、理念的な声が動き出すことを受け入れるようにして理解する。理解とはそれゆえ、理解しようとするものを模倣しつつ創造することであり、その創造に立ち会い、みずから理解されるものの一部となって身ぶりをおこなう」

“身ぶりをおこなう”、つまり「何かに集中的に取り組んだり、没頭したりする際は、おそらく魂と身体の有機的な調和のもと、充実した瞬間を無心で紡いでいる」ということらしい、そう、人それぞれの物語を紡いでいるのだ、これを「音楽的時間」とも言うとか・・・、そうかやっぱり道理で、“独り言”にしか成り得ない・・・！　　（了、2020 04 24 NY）

行く春やコロナで逢えぬ月朧ろ

存哉

（補）

＊G.ブルレが「音楽的時間」の中で、他の芸術表現との対比に於いて音楽形式を「記憶と期待の動的な総合」と言っているとか、また「音はひとつの出来事である」とも。何だか、前者は脳神経医のサックス先生を、後者は物理学者のカルロ・ロヴェッリを彷彿させる、つまりこの３人の泰斗は、ベートーベンの BPS を“得て勝手に”聴いている私を、ある意味で"保証"してくれているのだ！オドロキ‼